

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

白族のキリスト教信者、楊任修氏のライフヒストリー

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-11-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 横山, 廣子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5561

白族のキリスト教信者、楊任修氏のライフヒストリー

横山 廣子

はじめに

本稿は、筆者が白族研究の一環の中で行ってきた個人のライフヒストリー研究の成果の一部である。筆者は、中国雲南省大理市に住むキリスト教信者、楊任修氏から一九八七年と一九八八年の夏、それぞれ数時間ずつ、その生涯の体験について伺う機会を得た。以下にもあるように、楊氏は、大理の喜洲出身の白族である。喜洲は、F・シュエの著作中〔Hsu 1967〔1949〕〕のウェスト・タウンの名で知られる町で、解放前には大きな商売を手掛ける者たちを輩出した。それらの商人たちは、解放後の社会経済調査では「資本家」と位置付けられ、批判の矢面に立たされることになった。楊氏は「資本家」に使われる側の、貧しい農民の出身である。

楊氏の語る生涯は、民国時代から今日までの大理の白族社会のさまざまな実像を明らかにする。その内容については後の総括で触れることにするが、楊氏のライフヒストリー聴取によって、それまでの村落調査においては知り得なかった実態を掴むことができたということ、ここで述べておきたい。村落調査においては、外からやって来て住みついた者など、その他の一般の人々と異なる背景を持つインフォーマントに充分注意をしていたつもりであるが、楊氏のように外に出ていった者に関して多くを知る機会を得なかった。また、楊氏は、なぜ、どのようにに彼がキリスト教徒となっていたかを語る。プロテスタントおよびカトリックの宣教師が、雲南の少数民族の間で布教活動を始めたのは、一九世紀後半のことであった。キリスト教の布教活動は、景頗族など山地の少数民族においては、村落など

の集団単位の改宗をもたらししたが、白族においては、あくまでも特別な個人の改宗に留まった。楊氏の信仰確立までの経過は、彼個人の体験を通しての意識の変化を描くと同時に、当時の白族一般のキリスト教観をも映し出して、興味深い。

以下のライフヒストリーは漢語で語られた。日本語にするに際し、なるべく元のニュアンスが伝わる訳出を心がけた。また、整理の際に、話の順序に手を入れている。

一 幼い頃のつらい思い出

私は中国雲南省大理市喜洲ゾンチヤウ官充の人間だ。四人兄弟で兄が三人、私は四番目だ。生まれたのは辛亥の年、一九一一年。既に三人の兄たちは皆亡くなって、今は私一人になった。妹かい、妹はいない。姉は一人いたが、やっぱり亡くなった。

それでは、八歳の時から話そう。八歳より前のことかい、それはよく覚えていない。八歳から一〇歳の時代は、家庭生活が苦しかった。私は草を刈って売り、水を汲んで売った。⁽¹⁾銅鍋でもって水を汲んできて売った。朝は市で水を売り、午後になると家に帰り、草を刈って売った。一〇歳になると、母親が亡くなった。病気で死んだ。その後一〇歳から一三歳の時代は、山に行って柴を刈ってきて売った。その他に売ったのは洋火ヤンホ(マッチ)と紙巻き煙草。袋を持って通りから通りへと売って歩き、それで少し小商いを覚えた。一三歳になると父親も死んでしまった。兄は二人死んで、一人は外に出ていて家にはいな

かった。父母が亡くなって宗族はいなくなり、私はどうにも生活できなくなってしまった。そこで人の家に奉公に出た。喜洲に楊礼四という者がいた。主人の名前が楊礼四で、その店の名は宝源号といい、アヘンを売りさばっていた。私はその小僧になって三年勤めた。

当時、人の家で奉公するのは一番辛い仕事だった。一年でもらえたのは、服が一揃い、帽子一つに靴一足、それから銅銭(3)で一〇〇文(当時で約〇・七元)だけだった。一年を服一枚では足りないし、帽子も靴も年中同じものでは擦り減ってしまう。

銅銭一〇〇文は一日か二日ですぐ無くなってしまふ。待遇は厳しかった。やがて上着には穴があき、ズボンも膝や尻が透けてくる。そうすると上着の袖を取って前を繕い、長袖が半袖に、そしてチョッキのようになった。ズボンは裾を切って尻当てにしたから、長ズボンは半ズボンになった。靴は数ヶ月でぼろぼろになり、二足目はないから裸足でいるしかなかった。帽子も上着もズボンも皆ぼろぼろで、私は裸足で歩いていた。兄は家にいなかった。兄はもう結婚していたけれど、嫂さん(兄嫁)には子供がいて、とても私の世話どころではない。私の姉も既になかったから、全く哀れなもんだった。

それで一年の終わりになると、奉公先で、やっと服がもらえらる。明日は新年が来るといふ三十日の晩(旧曆十二月三十日)になると、ようやく、もらえるんだ。その晩に新しい靴を持って足を洗うに行く。それは哀れだった。裸足の足はひどいあか

ぎれで、一歩ごとに裂け口が痛んで、そおっと、こうやって歩いた。そして水の中に足を入れる。何度も何度もこすって洗う。本当に惨めだった。

私は店の主人に給金を上げてくれと頼んだ。服もお金も、もうちょっとくれないかと聞いた。それはつまり、もう働かないということだった。主人は、服は一年に一揃い、お金もそれ以上は出せない。おまえがいたけりやいてもいいし、いやならやめてもいいと言った。私は家に駆け戻った。家には嫂さんと子供たちがいる。私を食わせる余裕はない。そこで、喜洲の城南ナン(喜洲の南にある村)の姑媽オヤジ(父方のおば)の家に行った。

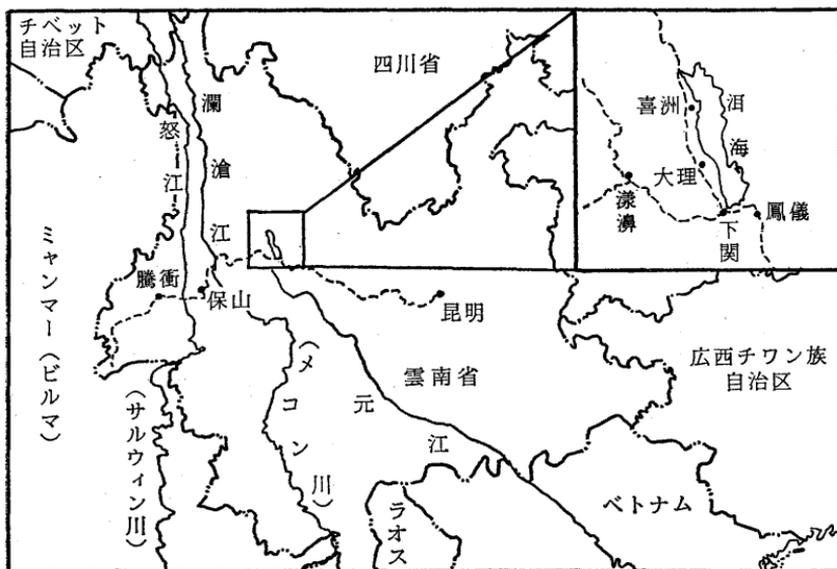
そこには一年余りいた。一三歳から一四歳の時だ。姑媽の家では牛の世話をし、山に行つて柴を刈った。きつい労働だった。それまでと同じようなことを同じように続けたわけだ。哀れだった。一年位過ぎて、またそこも飛び出した。姑媽の家もつらくていられなかった。

その頃、私には友人がいた。彼は一人息子で、その母親も私に同情してくれ、息子と一緒にいるようにと勧めてくれた。それはつまり、その家の人間が一人ふえるということだった。その友人の母は喜南という名前で、私を大変可愛がってくれ、とてもよくしてくれた。しかし、そこにも長くはいられない。当時、私の一番上の兄は騰衝トウチンにいた。その兄を頼って騰衝に行くことにした。私が兄さんのところへ行くと言うと、喜南は、あんなは道もよくわからないのに、そんな小さいのにどうして行

くのかと言った。私は、他に仕方がない、こちらにそう長くご厄介になるわけにもいかない、もう、でかけなければならぬと答えた。年端もいかない者が一人、お金もなくて、小さな行李を三元数角で買い、炒麵チヤウメン(小麦粉を麦焦がしのように加工した旅行用食品)も買い、途中で袋を縫ってもらって首にさげてかけた。騰衝へ行くといっても私は道も知らない。かわいそうなもんだ。いよいよ出発ということになって、喜南は私のために小さな麦わら帽子と、蠟引き布を準備してくれ、蠟引き布を背中にはおつてでかけた。その日は雨が降っていた。

二 騰衝までの道中

喜洲から下関シヤンまで来て、宿屋で休んだ。次の日は騰衝に向けて旅立ちだった。道で人に騰衝へは東駅から行くのか西駅から行くのかと尋ねた。西駅からで、東駅から行つてはだめだと教えてもらった。そこで東駅から西へ向かい、平坡街までいった。そこで布を売っている少年に出会った。その少年は私を見て、どこまでいくのかと聞いた。騰衝までと答えると、少年は、その道は今、ひたくりの泥棒が出るからとても一人では無理だと言う。私は、それでもしようがない、行くしかない、家にはいられないし、兄さんが騰衝にいるから、そこまで行くといい。すると少年は、よし、わかった、ともかく今晩は平坡街で俺と一緒に泊まったらい、明日は俺たちも濞溝街セイコウまでいっから、一緒に行けばいい、そしてそこから先の道連れが見つけれ



雲南省周辺図

ば、その人と一緒に行けばいいし、見つからなければ俺と一緒にいればいいと言ってくれた。そういうわけで、その晩はその少年の宿で厄介になった。

次の日、平坡街から漾濞へと出発した。しばらく行くと老人と三人の人夫を見つけた。老人は袋を一つ下げ、三人は天秤棒で荷を担いでいた。荷をよく見ると、一人の荷は土(藍玉)で、他の二人の荷はしっかりと縫って荷造りされていた。土藍は漾濞の市で売るのだから、他のは漾濞から保山か騰衝まで持って行くのではないか、この人たちはぎつと先まで行くと思つた。そこで老人に尋ねた——「伯父さん、保山までですか、それとも騰衝までですか」。老人は本当のことを言わず、「私らは、漾濞の市にきたんだ」とごまかした。私は心の中で、保山でなかったら騰衝に行くに違いないと思ひ、その人たちの後にずつとついて歩いて行つた。

そして、その人たちが休憩すると、私も休憩した。三人の人夫は私を見てかわいそうに思つた。老人も私に尋ねた——「おまえさんは、小さいのに旅をして、一体、どこの人間だ」。私は喜洲の者だと答えた。

「おまえさんは、どうして来たんだ」

「父さんも母さんも死んでしまった。兄さんは騰衝にいる。喜洲では暮らしていけない。生活が苦しい。だから兄さんを頼って行くんだ。」

老人はさらに私の身の上について尋ねた。私は自分の哀れな境遇を語った。三人の夫人は労働者で貧しい者たちだ。私のかわいそうな身の上を聞いて哀れんだ。そのうちの一人が私にそっと、保山まで行くことを教えてくれ、老人には知られないようにして一緒に来れば良いと言った。そうだと私は思った。宿屋に泊まり、お湯をもらって、炒麵をみんなに振る舞った。老人は心中、ほう、この小さい子は、なかなかできる、私らに御馳走してくれる、と思ったに違いない。

当時、その老人も騰衝へ行くには半開(銀貨)が必要だった。ニッケル貨幣は使えなかった。一五枚のニッケル貨幣で半開一枚が相場だったが、老人たちは取り替えに行っても、取り替えられなかった。私は自分が取り替えてあげようと言った。そして自分が持っていたニッケル貨幣を密かに一枚足して取り替えに行った。一六枚で一枚と替えたが、戻って来て、老人には一五枚で替えてきたと報告した。老人は、この子は本当に有能だ、私らは替えられなかったが、この子は替えてきた、と喜び、「私らはこれから保山に行くから、おまえさんも一緒に来るといい」と言った。私は「どうも有難うございます。それでは一緒にさせてもらいます」と答えた。私は老人のために顔を洗う水や足を洗うお湯を準備したりして、身の回りの世話をした。私にはまだ三元ちょっとの路銀があった。そこで「おじさん、私はお金がありません。路銀はこれだけです。これを預けますから、一緒に旅行するあいだ、毎日の食費をここから取

ってください」と言って、お金を渡した。老人は、よしよしと承諾した。

そうやって、保山に着いた。私は老人に聞いた。

「伯父さん、保山に着きました。皆さんは騰衝へは行かないんでしょ？」

「そうだ」

「伯父さん、騰衝へは、どの道を行くんでしょうか。私は知らないんです。皆さんが行かないから道連れもいません」

私は旅の途中、老人たちにはよく尽くした。老人も私をかわいそうだと思ってくれて、「心配いらないよ。おまえさんは、うちで休むがいい」と言ってくれた。

老人は保山で商売をしていた。私はその家に泊めてもらった。そして老人は私に言った——「行くなら私が手配してやろう。おまえさんのために人を捜してやろう。その人と一緒に行ったらい」。

すると老人の兄弟(兄弟とは言うが、父方のいとこ)が明日、騰衝に行くことがわかった。老人はその兄弟に「この子はいいい子だ。それに、かわいそうな子だ。とてもりこうな子で、商売もうまいから、あんたら騰衝まで一緒に連れて行ってやってくれ。この子のお金は、ここまでの道中、これだけ食べたから、あと一元数角残っている」と話してお金を渡し、さらに言った。「一緒に食べさせてやって、騰衝に着いたら、残りのお金を返してやってくれ」老人の兄弟は、うん、うん、と引き受けた。

翌日、私はその人たちと騰衝に出発した。四日歩いて騰衝に着いた。その頃は自動車はなかったから歩いて行くしかない。着いて宿屋へ行った。その人たちも宿に入った。私は老人の兄弟に「四叔（四番目の叔父に対する呼称）、今、私のお金とっても、ただ、この青い服一枚しかありません。それに炒麵がまだ少しあります。これを預けます。私は街へ兄さんを捜しに行きます」と言うと、外にでかけた。

三 兄との再会

騰衝の街には沢山の人がいて、兄をどこに捜しにいけばいいのかわからない。どこの場所で働いているのかも知らない。騰衝には四保街、五保街、六保街とあって、だんだんと歩いて行った。荷物は預けてあるから、ともかく歩いて歩いて行った。六保街まで歩いていくと、ある十字路があった。そこまで行くと、あれ、私の兄さんが傘を一本ぶらさげて歩いて来るじゃないか。ああ、兄さんだ、兄さんに会えた。大きな声で「兄さん」と呼んだ。言葉が出てこなかった。涙がこみあげてきた。私は一声叫んだぎり。兄も泣いた。私も泣いた。

兄は尋ねた——「おまえ、どうして来たんだ。なんでやって来たんだ。私は兄に話した——「奉公に行ったんだ。給金をあげてくれなかったんだ。服が擦り切れても誰も繕ったりしてくれないんだ。服をくださいと頼んでも、だめだった。だから兄さんを捜しに来たんだ」。

兄も泣いた。私たち兄弟は道の脇に行つて泣いた。道の真ん中で泣くのは恥ずかしいからね。泣いた後、兄は「誰と一緒に来たんだ。今、どこにいるんだ」と聞くので、「三人の商売の人たちと一緒に来て、その人たちは宿屋に泊まっている。自分の荷物はその人たちに預けてある」と説明した。兄は「さあ、行こう。おまえが案内してそこに連れて行ってくれ。その人たちのところへ、おまえの荷物を取りに行こう」と言う。

私は兄を案内して宿屋へ行った。その人たちが私の荷物を持って出てきてくれた。兄は礼を言った。荷物を受け取ると、残つたお金は数角だった。兄は言った——「さあ、床屋に行け」。そして床屋に連れていってくれた。髪も随分伸びていた。哀れな姿だった。顔を洗って、髪を切った。

兄は騰衝のある家で働いていた。商売をしているのではなかった。その家は特捐局（アヘンや玉などに対する特別税を徴収する機関）で、税金を集めており、一族が皆、一緒に住んでいた。兄は私を中心に連れていき、族長（家族長の意）に会わせた。家の中に入ると、あの頃の旧社会では、お爺さまだとか族長だとか十数人の人に一人ずつ叩頭しなければならなかった。一人ずつに叩頭して挨拶をした。族長の四爺（四番目のおじいさんの意、その世代での出生順が四番目であることを示す呼称）に、兄は「これは私の実弟で、喜洲にいたのですが、父母が亡くなり、宗族がいないので一人で私を尋ねてやって来ました。皆さん一緒にお住みの方の中に、手伝いのいる方はいませんか。

あればこれを一緒に住まわせてやってください。もしなければ、私と一緒に寝させてください。食費は私が負担し、外で仕事を捜させます」とお願いした。族長は「わかった、おまえと一緒に寝ればいい、うちで働くかどうかは私たちで相談しよう」と答えた。

私という人間は小さい頃から人の家で奉公をしている。翌朝、起きると、床を掃き、椅子を拭き、四爺らに顔を洗うお湯を用意し、お茶を入れて仕えた。よく気が付くし、仕事は早い。すると、おや、この子は気が利く、他の家にやることはない。ここで一緒に働けばいいじゃないかということになった。四爺の兄に二老爺ニノオヤジ（二番目のおじいさん）と呼ばれる人がいて、私はその下男シヤウボになった。いつでもどこでも二老爺に付いていき、荷物を持ちたり、いろいろと世話をした。

四 所帯を持った頃

騰衝のその家には半年過ごした。ところが私は既に父が死んだ時に、城北キョウノキのこいつ（楊任修氏の妻）の家に婿に行くことが決まっていた。婿にはなっていたんだが、まだ向こうには行っていなかった。その頃、こいつの家の方から手紙が来て、戻ってこい、祝言を挙げる、すぐに帰ってこい、おまえを連れにくる、ということだった。私は手紙をもらって、今度は騰衝から兄は戻らなかつたからまた一人で、ある一家のために奉公しながら一緒に戻ってきたというわけだ。そしてまもなく、こいつ

と祝言を挙げた。

祝言から一ヶ月ほどして、私はまた、今度は昆明クワンミンにかけた。そこでも奉公した。二、三年の間、奉公した。奉公先はあの騰衝で税金を集めていた家（彼らも喜洲の出身）だった。二老爺が昆明に行くというので喜洲からついて行ったのだ。二老爺の店も昆明にあった。二老爺の兄も昆明にいた。二老爺の兄は敵継光で、特捐局の主局長だった。以前、敵継光はアメリカ留学をした。留学から雲南に帰って、特捐局の主局長に任命された。敵家はそれからお金ができたので、店を開いたのだった。その二老爺フオオヤジ（同世代では年齢が一番上である敵継光に対する呼称）も昆明にいて、私が到着すると「喜洲から大勢の者が昆明に仕事を捜しにやってくるが、結局捜せない、おまえさんはここにやってきて一体どこで仕事を捜すのかね」と聞いた。私は「仕事があればいいし、なければ喜洲にもどるだけです、ここで二、三日泊めてもらえば十分です」と答えた。ところが私はその家でもよく気が付くし、仕事が早い。床を掃き、椅子を拭き、二老爺に仕える。貧乏者だから御飯の支度はするし、なんでもよく働く。そこでその家でも、これは働かざるだ、よく気が付くし、仕事は早い、他の家にやることはない、やっぱりここで働いてもらおうということになったらしい。私が二老爺に「仕事は捜していただけでしたか、見つかれば家に帰ります」と言ったところ、二老爺は「まあ、慌てなさんな、これからゆっくり見つけてやるから」と言う。これは、つまり、その家で私が

欲しいということだった。こうして、私はその家で働くことになつた。

その家には、二、三年奉公した。昆明ではもらった給金も多くはない。家に金を送ってやるといつても、二回程送つたらなくなつた。一方、喜洲の方では、祝言を挙げたと思つたら、ひと月も立たないうちに歩いてしまつたが、もう子孫を残すことを考えてもいい頃だと言う。婚家の母の言葉を借りると、「ちよつと戻つてきて家に居なさい」ということだ。その手紙を見て、私は喜洲に戻つた。もうそれ以上、昆明のその家には留まらなかつた。

喜洲ではどうだつたかという、奉公先はなく、下働きの労働をするしかなかつた。どこかで家を建てるといふと、そこに行つて泥や石を運んだ。下働きの苦しい労働だつた。田畑の草取りなど農作業の手伝いもした。喜洲でそうするうちに子供が生まれた。もう二年が立つていた。子供が増えたというのに、今度は喜洲地区の保甲長（大理地域では一九三〇年代後半に末端の行政組織である保甲制を再び導入した。およそ一〇戸が一甲、一〇甲で一保をなす）が穀物を集めるといふ。それぞれの収穫物の一割を集めるといふ。そこで生活はまた苦しくなつた。こいつ（妻）の老母、つまり私の岳母と子供と私ら二人、四人が食べていかななくてはならない。私は下働きで小銭を稼ぐ。こいつの母は農業、こいつは縫い物をしたり、機を織つたりして暮らしてゐた。子供はいるし、親もいる。そして穀物も集めら

れる。それで、いよいよ追い詰められ、食べるものがなくなつた。そこで私は盗みをはたらいだ。前に働いていた敵家に行つた。そこは金持ちで、家の中に並べてある時計や香炉や花瓶は値打ち物だつた。私はその中の一つをもらおうとした。ところが、まだとらないうちに、私の方が捕まえられてしまつた。するとその人々は、犯罪人だ、盗みをはたらいだといつて、喜洲中の家々に私のことを言いふらした。それで私はそこにはいられなくなつた。恥ずかしくて住んでいられなかつた。これは本當の話だ。

五 キリスト教との出会い

それで妻に、「私は喜洲にはいられないよ。よそへ行くことにする」と言つて、ちよつと正月十二日（旧曆）に喜洲を離れた。家族全員で撮つた写真一枚と必要な品いくつかを背負い籠に入れて喜洲を出ていつた。その日、街を離れた時は、歩きながら涙があふれてしかたがなかつた。心はとても痛んだ。何よりも三代の人間を後に残して出ていくことだ。母、妻、そして息子を置いていくこと。そうして喜洲から下関まで行つた。途中は悲惨な気持ちの一方で、これからどうするかを考えていた。下関に着くと宿を捜さなければならぬ。当時、宿に泊まる場合、一人では泊めてはくれない。二人なら泊めてくれた。途中で、やはり家を出て鷄足山チキソクサンに参拝した帰りの巍山ウエイサンの人間に出会い、二人で一緒に泊まることにして宿屋に行つた。初めの宿

はそこで泊まり、食事もそこでとることになっていた。私ら二人は、その飯を食べれば宿賃が高すぎる、自分たちで作れば安い、ということ以外で材料を買ってきて作ろうとした。宿屋の人にはそれが氣にくわなかった。私の相棒は主人と口喧嘩をした。そして私たちはその宿屋を出て、別の宿屋に行った。そこの宿は自炊をさせてくれた。ところがその晩になると、私の相棒は、よそへ泊まりに行ってしまった。私は一人で泊まるしかなかった。

しかし、眠ろうにも眠れなかった。家族と離れて心はつらかった。それから進むべき道の思案をして、三つの考えが浮かんだ。一つは兵隊になること。身を売って、つまり誰かの身代わりに兵隊になり、それと引き換えに貰う金を里の岳母や妻に送ってやる。これが一つ。二番目は、騰衝の玉石廠（玉の採石場）へ行き、商売をして金儲けをすること。三番目には、この世は貧しい者はひどく貧しく、金持ちにはたいそう金がある、私らは哀れな人間だ、どう仕様もない、人生も世の中もただ空しいだけだ、もうこれまでだ、ということを出家して坊さんになり、修行をすることだった。

私の隣の部屋に、ある男が泊まっていた名前を李福先といった。彼は竹細工を仕事にしており、アヘンを吸っていた。彼は私の身の上を尋ねた。私は、老母に妻と息子がいて、家を出てきたこと、これからのことについては三つの考え、騰衝へ金儲けに行くこと、兵隊になること、出家をすること、があること

を話した。しかし出家をするといっても、私には家族を捨てることはできない。年老いた岳母に子供もいる。偶然出会った李福先は、「兵隊はやめたほうがいい、私も兵隊になったことがあるが、全く惨めなものだ」という。そして、坊さんになるのもだめだ、あなたには三代の家族がいて、どうしてそれを見捨てられようかという。騰衝へ行くのは、まあいいが、一番いいのは、まず、イエスを信じることだという。

その頃私は二四、五歳だった、李福先は、イエスの信仰を知ってから騰衝に行くといいたいという。私が、騰衝に行くんだからその必要はないと断わると、李福先は、イエスは救い主で、旅先で何かあったらイエスに祈ればいい、故郷に残る家族のこともイエスならお守りくださる、かまわんじやないか、一、二日、一緒にゆっくりしてから行けばいいじゃないかとしきりに勧めた。そしてイエスを信仰することは坊さんになるよりいい、坊さんは偽りの神を拝むが、イエスの信仰は本当の神を拝む、あなたは正しい道を行きなさいと言ふ。私はイエスは、西洋人（西洋人）で、老洋人の信仰だ、中国人ではないと言った。李福先はイエスは老洋人ではないし、老洋人ではないと言った。李福先は上帝大皇耶蘇教師で、人々のために人々の罪を贖われたという。私は、罪というのは一体どういう罪のことだ、よくわからない、と聞いた。

盗み、かっぱらい、街の邪淫、真の神を拝まないこと、嘘つき、善行をせず、悪行ばかりをすれば、これこそが大罪だ、と

李福先が目の前で説明すると、私の方は心中ひどく感動した。それなら、思えば私もやはり罪人じゃないか。私らは何代も真の神、上帝を拝んだことはない。私はどんな罪も何でもあるんじゃないか。賭け事も女遊びも、そして人の物を取ろうとした。これは皆、罪じゃないか。私は本当にひどく心を動かされ、そうだ、イエスを信じようと思った。イエスに私のような罪人を救ってくれるよう頼もう。そうじゃないか。わたしは心の中で自分に問うた。まず、私は罪を背負っているじゃないか。今は私がどの道を選ぼうとしても、道はない。ただ悔い改めてイエスを信仰すれば、イエスは私をお救いくださり、道が開ける。騰衝に行くとして、イエスを信仰すればイエスは途中、私を守りくださる。心の中でこのように考えた。

六 キリスト教徒への道程

李福先は、イエスを信仰するには、祈禱をしなければならぬが、自分も祈禱はできない、と言う。どうか祈禱を教えてくれと言うと、下関の街に段大媽ダイマ（段おばさん）という人がいて、その家は豆粉（エンドウ豆でつくったプディング状の食物）を売っている。その人たちは祈禱ができるから明日、そこに連れて行ってやろうという。祈禱のやり方さえ習えば、旅先で何かあったら、困ったことがあったら、祈ればいい、イエスがきくと救ってくれる。彼はそう言って私を段大媽の家に連れて行った。当時、李福先は竹細工をして村々を回っており、七五村チゴのイ

エスを信仰する段家に泊まったことがあった。この家の人はイエスを信仰する大変親切で優しい人たちだった。李福先を家に泊めてやった時に、彼にイエスの教えの道理を教えてやったのだった。李福先はイエスの教えは良いと思った。人を導くものだと思った。しかし、イエスを信仰するにはアヘンをまず断たねばならないと考え、信者になるのを決めかねていた。キリスト教はアヘンを吸うことを許さなかったからだ。

私が段大媽のところへ行くと、まあ、本当に息子同然に可愛がり、とてもよくしてくれた。段大媽の愛の心は素晴らしいものだった。段大媽は、「ああよく来た。イエスを信仰する、そりゃいいことだ。さあ、イエスを信じなさい。イエスは人をお救いくださる。イエスは救い主だ。あなたのつらく苦しい毎日をイエスがお救いくださる。あなたが旅にかけて、何か困ったことがあれば、イエスに祈りなさい。イエスはきくとあなたを助けてくださる。あなたのために道を開いてくださる」と言って、私たちの面倒を見てくれた。本当にいい人だった。私らはそこで御馳走になって、祈禱のやり方を教わった。それから私ら二人は元の宿屋に戻った。

私は宿で李福先に、村に行つて一日、竹細工をして一体、いくら稼げるのかと尋ねた。彼は三、四元位だと言う。材料費はいくらぐらいかと聞くと、数角という。それなら材料費を除いてもまだ二元いくら儲けがある。私は喜洲で下働きをして一日に八角もらうのがせいぜい。その三分の一ほどだ。八角

では四人家族は食べていけない。しかし二、三元というたいしたものだ。私は考えた。騰衝に出稼ぎに行っても、坊さんになっても、兵隊になっても、家族を置いていかねばならない。この技術を覚えれば、そうしなくても暮らしていける。そして李福先のもとで竹細工の修行をする間、毎週日曜日に段大媽たちと一緒に礼拝をして、そちらの方もよく覚えることができる。そこで、「李師傳（親方）、私を徒弟にして、竹細工の手仕事を教えてくれませんか」と頼んだ。李福先は、竹細工を習うのはいいかも知れない、あんたがイエスを心から信じるというなら、教えてやるう、と答えた。私は、きつとイエスを固く信じます、と誓って、竹細工を習うことになった。

私は彼のそばで竹細工を習った。李福先と一緒に村々を回りながら、仕事を覚えた。竹は下関の市で買って置いて、毎日、朝起きて食事をするときすぐに村に出かけた。二人で一日に四、五元、多いときは五、六元は稼いだ。私は修行中だからお金は貰えない。私と一緒に儲けは多くなるので彼も喜んで私に教えてくれた。そうやって三ヶ月を一緒に過ごした時、李師傳は病気になった。唇に大きなできものができた。それで彼は下陽溪の家に帰ることになった。彼は、もう仕事は覚えたか、一人で作れるかと尋ねた。私は、大丈夫だと答えた。三ヶ月でどんな物でも編めるようになっていた。それから李福先は自分の村に帰って行った。

私は喜洲には帰らず、一人で竹を買い、農村で仕事を続けた。

太和村の趙という家に厄介になりながら仕事をした。一家で、やはりキリスト教を信仰していた家だ。その家で寝泊まりと食事をして、一日の食事代として四枚のニッケル貨幣（一枚が一角）を出した。その家の人もいい人達だった。私の腕も良かったから、毎日、二、三元ずつ儲かった。皆も喜んだので、私はどんどん作った。

七 キリスト教徒となる

私は手仕事をする一方で礼拝にも行き、イエスの教えを聞いた。詰まるどころ本当に良いものか、あるいは偽りなのか、私の心中にはまだいくらか疑いがあった。イエスは信仰できない、あれは洋教だ、それにイエスを信じて死んだら、外国人があんたの手足に十の枷をはめ、尻には帯をつけて、牛や馬に変えてしまふ、洋人の牛馬になってしまふ、と言う者もいた。私ら中国人は中国の教えを信仰すればいい、イエスは老洋人で洋教だと他の人は私に言った。他の人はこういったが、私というのと、礼拝に行つて話を聞くと本当に良いと思う。本当に信じる気持ちもあるが、しかしまた、内心不安もあった。よしそれなら、たくさん聞いてみることにしよう、もっとよく理解してみようと思った。試してみようというわけだ。

そうすると、大理教会に三人の長老がいた。銭長老は大理の人で、趙長老は太和村の人、それから李長老がいた。長老たちは鳳儀に福音を伝えに行くという。布団を背負って行く者を雇

うという。私は心の中で思った。布教に行くというが、昼間は良いことを話して、夜になったら何か悪いことをしはしないか。一緒に行けば彼らの本当のところかわかるというものだ。そこで、私が布団を背負っていくから他の者を雇う必要はないと言った。

こうして鳳儀に布教に出かけた。長老たちは昼間、話をして、夜もそれを続けた。私も入れて四人がイエスを信仰する人の家に行つて礼拝をし、慰めるわけだ。そうやって教えを伝えた。夜の活動が終わつて、話を聞きにきた人々が帰ると、皆やつと眠りにつく。そうすると、私は注意を払つた。人々が帰つてしまつと、イエスを信仰するその家の主人たちと私ら四人だけになる。夜に何かいかがわしいことをするんじゃないかと、私は眠つたふりをして目を閉じて盗み聞きをした。彼らの本性がわかるということだ。あれ、そうすると、長老もその家の人々も皆ひざまずいて祈り始めた。天の神様、救い主イエス様、今晩、私共が伝えた道に誤りがありましたら、どうぞ私共の罪をお許しください。御心になうように伝えることができ、人々が感銘を受けたのでしたら、どうぞあの人々をお救いください。そう言つて、その晩やつて来た人々のために祈りを捧げていた。

真心で人々を愛し、眠る前にも祈っている。私は布団の中でそれを見て、聞いて、たいそう感動した。最近は何のいる前では良いことばかりを言つて、いなくなると陰で悪口を言う者が多い。それなのに、この人たちは、人々が立ち去つてから、そ

の人々のために祈っている。その罪が許され、救われるように祈っているじゃないか。あの人々は何も知らないというのに。ああ、イエスの教えの道理は大変素晴らしいものだ、と私は思った。そして、決めた。もう疑つたりしなかつた。

鳳儀には一週間行つて戻つてきた。大理に戻ると長老たちはそれぞれ家に帰つた。私はまだ喜洲には帰らず、農村で竹細工の仕事を続けた。

宝林村にもイエスを信仰する家がいくつかあつた。そのうちの**ベオシ**一つはヤコブ（白族で、ヤコブという洗礼名をもらつた男子）のお母さんのところだつた。ヤコブの父親の病気が重く、死にそうだという時、ヤコブのお母さんが私に、お父さんが危ないから太和村の趙長老を呼んで欲しいと頼んだ。祈禱をしてもらいたいということだ。私は急いで趙長老の家まで行き、あわてて戻ろうとした。すると長老はゆつくり行こうという。私が、死にそうだから早く行かなくては、と言つと、病人は私を待つさ、天の神様が私らが着くまで待つようになさる、と長老は言う。果たして私らが到着すると、病人がそこに待っていた。間に合つた。病人に祈禱をさせた。そして間もなく病人は亡くなった。

その頃、人は、イエスの信者が死ぬと目玉をくりぬき、手足に十の枷を、尻には帯をつけて、馬や牛にしてしまふとか言つていた。だから私は心の中で思った。これは良い機会だ。この目でしっかり確かめてやろう。ヤコブの父親が死ぬと、棺が運

び込まれた。死人を納棺するわけだ。そして、来ていたイエスを信仰しない者たちを外に追い出し、扉を閉めた。皆がひざまずいて棺を囲んで祈禱を始めた。この者は今、一生を終えられた。天の父なる神イエス様、どうかこの者の罪をお許しください。いまこの者の生涯は終わりました。どうかその靈魂が天に上りますようお願い下さい。その子孫たちが平安に暮らせますように。

祈禱が終わると棺に蓋をして、扉が開けられた。外にいた者たちの中には、ほら、扉を閉めて中で枷をはめたり、帯をつけたり、目玉をくりぬいたりしたに違いないと、おかしなことを言うのがいた。私は、そんなことはない、私はそばですっと一部始終見ていたと言ってやった。

鳳儀に行った時も、死者を送った時も私は彼らの本性をうかがったわけだ。そして本当に心からイエスを信仰し、人を愛するのを見た。そこで私は真正正銘、イエスを信仰することを決めた。それから農村に仕事に行くかわら、熱心に人々にイエスの教えを話した。崇邑村チヨウイに行った時は二十数人に伝道した。その陳姓の家の者はほとんど信者になった。その頃、村にはまだ教会の支部はなかったが、その後、それも設立されるようになった。

当時、大理教会には馬牧師という外国人の男の牧師がいた。四〇歳余りの人で、民家語（白族は当時、漢語では「民家」と呼ばれた）はできなかったが、漢語ができた。

八 信仰への帰依

そうこうするうち、お金が少したまり、私は喜洲に戻ることにした。ほぼ一年ぶりだった。

戻って、家の者に数十元のお金を渡して、話をした。

「今回、家を出た時は、お金を持って帰れるようになるまで戻らない覚悟だった。帰るのは、大体、お金を持って帰ってき、田んぼを買ったり、家を建てたりする時のはずだった。今戻ってきたが、私は田んぼも買わないし、家も建てない。そのために戻ってきたのではない。私はイエスを信仰するために戻ってきたんだ。私は手仕事を覚えた。イエスが私を救ってくれたのだ」

ところが、戻ってみれば、家族は以前として迷信を信じて、線香を焚き、金紙銀紙（神や祖先、あるいは鬼など超自然的存在に貨幣として捧げるもの）を燃やしている。私はその線香やら何やらを皆捨ててしまった。すると、こいつ（妻）の母親は、わたしの気がふれたと言いつ出した。私はイエスの教えを説いた。そして数日後に再び喜洲を後にした。

竹材料を持って下関の方でかけた。農村で仕事をした。そして自由に伝道活動も行った。これは何年も続いた。そうするうちに陳宣教師と出会った。下関の下村シムラには教会があった。中華基督教国内布道会が街にあった。その数年前からできたのだ。その会堂に陳玉林牧師がいて、私は祈禱会にちよくち

よくでかけた。ある晩、陳牧師は私に信者かと尋ねた。私はイエスを信仰していると話し、牧師の話が素晴らしいから毎晩のように来て聞いていっていると云った。それから牧師と親しくなつた。

ある日、牧師は私に、鳳儀に分堂を開きに行くので人を一人雇いたいと話した。民家語も漢語もできて、イエス様を信仰する人間だとのことで、私は、それはなかなか難しいと言つた。

すると陳牧師は、あなたはイエス様を信じているが、漢語は話せるかと尋ねた。できると私は答えた。イエス様を信仰し、漢語も民家語もできるなら、ひとつ私を助けてくれませんかと牧師は言つた。陳牧師の給料は上海元（国民党政府発行の貨幣）で二〇元だったが、私には給料としてその半分の一〇元が出るという。一〇元は二〇元の半開に替えられる。二〇元の半開は七〇元余りのニッケル貨となる。⁽⁵⁾それは農村で竹細工の仕事を

するよりいい条件だった。仕事をしながら伝道活動をするよりずっといいと思つた。私が承諾すると牧師は上海の總會に手紙を書き、總會の許可の下に私は牧師の手伝いをする事になった。家族にいくらか送金し、私は鳳儀で陳牧師の布教活動を手伝つた。二、三年は続いた。

鳳儀では家を借りて布教をした。やがて陳牧師は再び上海の国内布道会に手紙を書き、助手は雇つたが、やはりもう一人宣教師を送つて布教を助けて欲しいと要請した。上海の總會は王長恵宣教師を派遣してきた。この宣教師は杭州の人だった。陳

牧師は北京から来て、たいそう学のある人だった。宋美齡（蒋介石夫人）と同窓生だったということだ。ところがこの二人の宣教師の仲はあまり良くなかつた。陳玉林牧師は女性で、結婚したことがなかつた。沢山の人が近づこうとしたが、牧師は近づけなかつた。心も本当にきれいな人だったが、姿もとてもきれいだつた。たいそう美しい女性だつた。お金も沢山あつた。しかし牧師は着飾ることがなかつた。髪はめっちゃくちゃで、化粧気も全くなかつた。本当に飾り気がなく、服もお婆さんの着るような地味な物を着ていた。

私は牧師に「宣教師さま、お金もあるので、きれいな服を着たらどうですか」と言つた。すると牧師は「私どもはキリスト教を伝道する者です。教会の者です。私という人間は美しく生まれませんでした。この上、着飾ったら、私を思う方も少ないでしょう。私は清い身でありたいのです。それなのに人が私に思いをかければ、その方は罪を犯すことになります。私はそのような事態を招きたくないのです。」

陳玉林牧師は本当にいい方だつた。

二人の宣教師の關係が良くないので、しばらくすると陳宣教師は下関に戻り、私と王宣教師は鳳儀で布教を続けた。すると王宣教師は私に、「楊さん、貴方はまだ若いし、私も若い。私達二人が同じ家に住むことを、人はとやかく言います。それはあまり良くないことです。貴方の家族を呼び寄せては如何でしょうか」と言つた。私は「呼び寄せるには金がかかります。こ

ちらに任せればそれでまた金がかかります。喜洲にいる分には農業をやって、私がいくらか送金すればいいのですが、こちらに来るとなれば、何から何まで私が面倒を見なければなりません」と説明した。「総会がいくらか余分に出すでしょう」と王宣教師が言うので、そこで、私は家族を迎えに行き、鳳儀に連れてきた。

九 戦争

ところがちょうどその時、中日戦争が始まった。中日戦争が始まると、総会は、財源が縮小したとかで、布教活動員の給料を二〇%削ると言ってきた。私の一〇元は上がるどころか、八元になってしまった。家族もやってきたし、それでは生活できない。私はいろいろやりくりして、何とか暮らしていくしかなかった。その当時、この大理教会に梁牧師というアメリカ人の男の牧師がいて、私の窮状を知ると、「暮らしていけないのなら、そこにいることはありません。戻って来なさい。戻って大理にいらっしやい。教会の家に住めます」と言ってくれた。私が「戻れば給料もなくなってしまう。引越しの費用もありません」と言うと、「私がお金を出しましょう。半開で一〇元あげましょう」と言ってくれる。そこで、私は家族を連れて、一日で鳳儀から大理に移って来た。鳳儀で家族と一緒に暮らしたのは三ヶ月だった。

大理に来ると、今度は、こいつ（妻）が病気になる。吐血

して、これは肺病だという。結核のことだ。第三級の結核で、薬を飲んでも効き目がない。ところが上海から来た伝道の先生がいた。宋という姓の、宋上傑博士で、伝道者の中でも一番聡明な人だった。この人が、病いの者はいらっしやい、わたしが祈禱をしてあげましょうという。こいつが病気だというから私は翌朝、早速、跪き、宋博士は手をこいつの頭の上に置いて祈禱をしてくださった。祈禱が終わると身体はすつとして、苦痛はなくなった。ありがたや。私は、上帝に対して祈禱してもらったから、天の主は宋博士の祈禱をお聞きになったのだ、信じなさい、私はもう病気を医者に診てもらう必要はなくなつた、薬も飲むことはない、注射も打つことはない、と言って、薬は返した。その時以来、今日までこいつの病気はなんともない。

こいつが病気になる前、私には二人の子供がいた。息子二人で、八歳のが一人に、七歳のが一人だった。この子たちは皆、死んだ。上のは回虫で亡くなった。細い長い虫だ。おなか痛くなり、吐いて、目が変になって死んだ。下のは脳膜炎で、眠り続けて死んだ。現在、成都に居るのは三番目で、銅山に居るのは四番目だ。今の二人は、こいつが肺病になって宋博士のおかげでそれを乗り越えてから生まれた子たちだ。私はイエス様を信じ、信仰の心が厚い。主のために働いてきた。そして私の困難は信仰とともに克服された。こいつの病気が治り、二人の子供にも恵まれた。私の神を愛する心は益々強くなった。

また、大理にいる時、外国人の郭宣教師がやってきて説教をした。天の門も道も狭く、罪を持つ者は通り抜けることができな。地の門や道は広く、何を持った者でもそこを通り抜けるのは易しい。心にやましいことがある者はイエスを信仰するにあたって、その罪を償わねばならない。私はその話を聞いて心を動かされた。私は小さい時、父母がなくなつて、まだ一〇歳とか一三歳の時に奉公に出た。奉公先はいろいろな商品を売つており、その中に食べ物も多かつた。当時、私は小さく、物事もわきまえておらず、商品を盗み食ひしたことがあつた。郭宣教師の説教を聞いて、私はそれを思い出した。店の主人に食べてもいいかと聞いて、許可をもらつてからだつたら罪ではないが、何も言わずに何回か食べたのだから、私には罪がある。説教に感動した私は喜洲に帰り、一〇元のニッケル貨を持つて元の主人に会いに行つた。私が「旦那さん、借金を償いに来ました」と言うと、主人は「おまえはうちの徒弟だつたんだから、返すお金などない」と答えた。私は「旦那さんは知らないけど、天の主、イエスは御存じだ。私は小さい頃、あなたの物を盗み食ひしました。あなたは知らないけれど、私の良心が許さない。今日、その代金を返します。いろいろありましたから、一〇元返します」とお金を差し出した。主人は済んだことだからとお金を受け取ろうとしなかつたが、私は自分の罪を免れるためだと説明して受け取つてもらつた。その時はまた、昔喧嘩をして毒突いた人たちのところへも行って謝つた。

小さい頃の哀れなことを思うと、今は全く違ふ。例えば、私の服は何枚あるだろうか。着尽くせないほどある。靴も靴下も七、八足ずつある。履きつぶせない。小さい頃は一年に一足で、他には何もなかつた。かわいそうな身の上だつた。ところが、私の子供はどうだ。私は一〇歳で母親が死に、一三歳で父親が死に、学校へ行くことがない。

私はそういうわけで梁牧師の助けで国内布道会から大理に戻つて来た。梁牧師は私に家を提供してくれて、一家でそこに住んだ。もう伝道はしないで、竹細工の仕事に戻り、農村に行つて箕を編んだ。買えば一元二角位の箕の修理代は六角で、一日に四つほど直せば二元四角になる。下働きの日雇いをやつても八角しか貰えない。漁網を編んだり修理したりもした。その後、飴も作つた。私は、今の果物飴でも何でも作れる。人が作るのを見て自分で覚えた。二、三年、飴を作つて売つた。しかしその商売もだんだんうまくいなくなつた。その頃、上海から来た伝道者の申宝隆牧師から牛肉松ニウロウソン（牛肉を細い糸状にして加工した佃煮のような食物）の作り方を習つた。申牧師は私の暮らして苦しいのを見て、飴はやめて牛肉松を作つて売つたらいいと教えてくれた。牛肉松は一番儲かつた。中日戦争が始まつて、滇緬公路（雲南とミャンマー「ビルマ」を結ぶ幹線道路）が通行できなくなり、旧街道を行くようになる。馬幫マバング（馬やラバを使って荷を運ぶのを仕事とする者）や金持ちたちは牛肉松を欲しがり、数十キロと買う者もいた。注文を受けて作り、随分儲か

った。お金ができたので、それから食堂の店を開いた。それもはやった。人を雇ってやった。その頃、近所の店の主人で麻雀好きな人がいて、一人足りないなどとよく誘われた。それで私も賭け事をするようになり、店のことも顧みなくなり、人に任せっきりにしてよくでかけた。教会の礼拝にも行かなくなった。

当時、日本の兵隊は保山や騰衝まで来ていた。しかし、やがて日本は降伏した。中国人は勝利だ、日本が降伏したというので爆竹を鳴らして喜んだ。日本と戦って負傷した中国兵が大勢、大理までやって来た。食堂をやっている者があると、負傷兵が入ってきて食べて出ていく。誰かが露店で物を売っていると負傷兵がそれを黙って持っていく。しかし誰も咎めようとはしなかった。負傷兵は元はといえば貧しい人間で、兵隊にとられたというわけだ。あの頃の旧社会では、兵隊は食うものも着るものも、皆、不十分で、裸足で歩いていて、今のように長靴でさっそうと行くのとはわけがちがう。そういう負傷兵が私の店に来て物を食べても、私は代金など請求できなかった。賭け事とそんなことが度重なって、店はうまうまなくなつた。

このまま大理にいてはどうにもならない。悪い仲間と手を切ることはできない。そこで私は、また大理に家族を残し、家を出て保山へ向かった。道連れと一緒に保山に行き、そこで飴を作って売り、半年を過ごした。保山へ行ったのは、そこからミヤンマー（ビルマ）へ行って一旗上げようと思ったからだが、一人になって考えると、自分は花が咲きそうに見えたが、もう

終わりだ、これからは花など咲きそうにない、いい暮らしをしようなどと思つてもだめだ、と気が付いた。私のこの代は希望がないが、娘と息子がいる。家に戻って二人を育てようと思つた。それから大理の店をたたんで一家で下関へまた移つた。

下関のイエス様を信仰する者たちは、私のことを知っていた。そこで何人かがお金を出し合つて一〇〇元準備してくれた。それで私は店を開いた。店の家賃は一ヶ月五〇元だった。半年が過ぎると赤字続きで、お金はすっかりなくなつた。するとある人が私を下関の教会に紹介してくれ、教会の世話をする仕事、つまり掃除をし、お茶の給仕をし、門の開け閉めをする仕事を与えてくれた。それまで教会には老人が一人で住んでいてそういう仕事をやっていたが、アヘンを吸うのでふさわしくないといふことになり、かわつて私ら一家に来てもらいたいということだった。教会の管理の仕事の他、教会の田畑は全て無料で私に耕させてくれた。給料はないが、田畑で収穫したものは自分のものになった。私は一〇畝余り（一畝は約六・六七アール）の田畑をすっかり耕し、花や果樹も育てた。

一〇 解放後

そこで二年がたつて、解放（大理では一九五〇年初め）となつた。

解放後の社会の変化は大きかった。土地改革で地主は土地を失つた。土地を持たない者には土地が与えられた。貧農や下層

中農は解放されて生まれ変わった。しかし教会の私たちの暮らしには余り変化はなかった。誰も私には田畑もお金もくれなかったし、私も人の物はほしくない。私は一生貧乏者だ。

文化大革命の頃は教会の門は閉じられた。信徒は責められた。手を後ろ手に縛られて強制された。私は内心の信仰は変わらなかったが、もう信仰しないと云った。十数年の間、教会は閉ざされていた。あの頃は反右派闘争だの何だのといろいろあったが、もう忘れてしまった。教会は閉じられ、田畑には家が建てられて耕作することはできなくなった。それで仕方なく、果樹園の花や果物を売っていたが、その後、供銷社（国家政策に基づき、生産用具と生活用品を供給するために農村部に作られた集団経営の商店）がやってきて、全部掘り起こしてしまつた。途端に生活できなくなつてしまった。それで喜洲に戻り、そのの家屋を売った。七五〇円で売れた。その家屋は、元はと言えば私たちの物だったが、こいつ（妻）の二叔（父の弟で、兄弟の中では上から二番目であることを示す呼称）が住んでいた。二叔は地主ということで家を取り上げられた。私は村を離れていて、いなかったが、村の人がかわいそうな貧しい人間だと云ってくれたお陰で、田畑はもらえなかったが家だけはもらうことができた。

下関では結局四〇年くらい暮らした。ここ大理には、一九八六年に戻ってきた。大理の教会の長老の一人が私を知っていて呼び寄せた。この場所は文化大革命以後、一般の居民が使つて

いた。文化大革命後の回復政策によって再び信教の自由が確認され、また教会に戻されることになった。神聖なもの侵すべからずだ。しかし大理教会の者は少なく、三四人しかいない。教会に責任を持つ者は三、四人で、門の番をする者もいない。そこで私を呼び寄せたというわけだ。

私がお金を見るといふことになれば、下関からは引越した。土地や住むところは提供してくれるので私がお金を出す必要はない。引越し費用も全部出してくれた。私はいよいよ引越すことになるまでそれを下関の人々には言わなかった。私が大理に行くと言つた時、皆は訳がわからなかった。何故もつと早く言ってくれなかったのか、まだ話すことがあつたのと言われた。黙つて行つてしまふなんて、とたいそう残念がられた。

皆、私に会いにきて泣いた。下関教会の人々は、私は四〇年余りの期間、誠実に仕えてきた、教会は、いまや復興して二〇〇〇三〇〇人の信者を数えるまでになった、と惜しみ、皆でお金を出しあつて一〇〇〇元の金一封、電球、布団カバーなどを贈ってくれた。

私はこれまでに二〇回引越しをしたことがある。大理から農村へ、農村から大理へと行ったり来たりを繰り返して、最後に大理から下関へ、そして今度また下関から大理へやって来たわけだ。大理に出たり入ったりは、これで三回目だ。農村へは一〇数回出入りを繰り返した。私の一生は引越しの連続だった。私には何もない。田も畑も、店も家も何もなく、ただこの身が

あるのみだ。わたしが大理で店をやっていた頃は金があつた。あれでうまくやっていたら地主になっていたかも知れない。この大理でも、私は給料はないが、家賃など払わなくてもここに住んでいられる。仕事は教会の人の出入りを見る一方で、布教活動をするのだ。

おわりに

一九三七年から三八年にかけて大理に滞在し、F・シュエとは異なる角度から、解放前の白族に関する貴重な人類学的研究を残したC・P・フィッツジェラルドは、白族が漢族文化を多く受容しながらも、同姓不婚に非常に寛容な点など漢族一般とは異なる白族の特徴に気付いた。その理由として、彼は、長い間、白族地域が閉鎖的状态にあつたためだと考えた〔FITZGERALD 1941: 89〕。しかし、この理由付けは妥当であるとは思われない。楊任修氏のライフヒストリーが示すところは、少なくとも民国期には、手広く商売をする大商人のみならず、貧しい層においても、収入の道を求めて大理から外に出ていった白族が少なくなかったことを語る。さらに、市の間を移動しながら輸送や小商いによって収入を得ることも決して珍しいことではなかった。この傾向は、遅くとも清代後半からあつたと筆者は考えている。この点については、稿を改めて詳しく述べたい。

白族の大きな特徴は、そのような外との交流の中で漢族文化を摂取し、雲南地域においては漢族にまさるとも劣らない経済

的あるいは文化的水準を持ち得たということである。そして、特に楊氏の奉公先の様子に垣間見られるように、上層においては、漢族文化において理想とされる大家族の家族構成が存在した。しかし、その一方で、楊氏自身もそうであるように、夫方居住を原則としながらも妻方居住婚が頻繁に行われるという特筆できる状況が存在した。⁽⁶⁾

楊氏の幼い頃は、大理に西欧文明が盛んに流入した時代であつた。「洋」という形容詞の付いた人や物がかなりの勢いをともなつて進入してきた。その受容に関して、楊氏の周辺では、物に対しては寛容で、精神文化と関わるキリスト教に関しては強い抵抗があつたことが見受けられる。これは漢族一般について言われる特徴と一致している。

楊氏は、キリスト教に対する懐疑を捨て、その信仰に帰依し、次第に布教活動にも深く関わって行く。その過程を考察すると、楊氏、さらにその信仰のきっかけを作つた李氏といった、村落間を移動して生活する者の存在、あるいはその人間関係が白族におけるキリスト教信仰の普及に大きな作用を及ぼしていたのではないかと考えられる。

以上に述べたこと以外にも、当時の流通貨幣の状況、アヘン吸引の実態など、楊氏のライフヒストリーはさまざまな事実を伝える。本稿の目的は、楊氏のライフヒストリーの提示そのものにあり、それを資料として白族社会について論じることではない。しかし、このようなライフヒストリーの蓄積が、より鮮

明な白族社会の理解に通じるといふ見通しを筆者が持っていることを最後に述べたい。

注

(1) 市において主として少年などが売って歩いた「水」は、市に來た人のための飲料水である。たいてい水とマッチ（一本ずつのバラ売り）を「ングーシユイ、ングーフォ（水売り、マッチ売り）」と白語で叫びながら売って歩いたという。

(2) 「宗族」とは、本来は同宗、つまり同じ祖先を持つ父系出自集団を意味するが、ここで楊任修氏は、「家族」と同義にそれを使っている。

(3) 銅銭とは、中央に正方形の穴のある、いわゆる方孔円銭のことである。中国では戦国時代の後半期に銅銭が造られて以来、清代に至るまで、歴代王朝が銅銭を鑄造してきた。清代の主たる通貨は、銀と銅銭であった。清末の貨幣制度改革によって、方孔のない、洋式の銅貨が一九〇〇年に発行され、長年にわたる方孔円銭の伝統に終止符が打たれた。しかしながら、雲南の大理地域では、その後も、中華民国政府の幣制改革が浸透する一九三六年頃まで、事実上、銅銭が使用された。民国期の一九一二年から三七年までの中国は、軍閥割拠の時代であり、各地でさまざまな通貨が鑄造されて、流通貨幣は複雑を

極めた。因みに、当時の大理で流通していた貨幣には、銅銭の他に、銀、半開（後述）、民国初頭に雲南で印刷発行した旧滇幣、「唐頭」と俗に言われた、軍閥唐繼堯の頭像のある一元銀貨、新式の銅貨とニッケル貨、そして金貨があった。当時、銅銭約一五〇〇文がほぼ一元であったという。元の下単位は角、その下は分である。それぞれ一〇角、一〇〇分が一元に相当する。

(4) 半開とは、民国初年に雲南で鑄造された銀貨である。一枚の値は五角、つまり一元の半分であったので、その名が付いた。半開は以後、解放前の雲南の社会における基本的通貨であった。

(5) 楊氏が一五歳頃に騰衝に行った時の相場と比べて、この相場はニッケル貨の値が多少下がっている。つまり、かつての交換相場ならば、半開二〇元は、ニッケル貨で約六〇元という計算になる。

(6) 妻方居住婚については拙稿「横山廣子 一九八七」参照。

参照文献

FITZGERALD, C. P. 1941 *The Tower of Five Glories*, London: Cresset Press.

Hsu, Francis L. K. 1967 [1948] *Under the Ancestors' Shadow: Kinship, Personality, and Social*

Mobility in China, Stanford: Stanford University Press.

横山廣子 一九八七 「大理白族の妻方居住婚」伊藤亜人ほか(編)『現代の社会人類学Ⅰ 親族と社会の構造』東京大学出版会

(よこやま・ひろこ) 東洋英和女学院大学助教授)